



「なに言ってるのっ、苔は日本に一八〇〇種類以上あるんだよ。この辺だとギンゴケ、スナゴケ、ジャゴケ、ハイゴケ、シノブゴケ、コツボゴケ、それから」

「わ、わかった。そうなんだ、苔っていろいろあるんだ」
あたしが言うのと石丸さんは満足そうにうなずいて、また生け垣の苔にルーペを向けて観察してる。

「苔って、少し湿り気のあるところを探すと見つかりやすいんだよ」
なんだか不思議だ。石丸さんっていつも一人なのに、少しもさみしそうじゃない。むしろ楽しそう？

「ね、ひとりでそんなことやってて本当に面白いの」

えっ？ とルーペごとこつちを向いた。

目がでかい……。

あたしはルーペを持った石丸さんの手を下に押して、もう一度聞いた。



教室へ行くと、コマリの席のまわりにガツコと彩乃と七海がいた。移動教室の班のメンバーだ。あたしはその横をだまって通って席につき、教科書を出しながら、ちらちらと四人に目をやった。

彩乃がコマリの癖のある髪を編みながらなにか言っている。コマリはうれしそうにほっぺを赤くして、持たされている手鏡をじっと見てる。その横でガツコが「おー」とか「すごっ」とか声をあげている。

なんか、楽しそう……。

しくつとおなか痛くなった。

コマリは、前からうねうねした髪が悩みだと言ってた。あたしの真っ直ぐな髪がうらやましいって。あたしはそんなコマリに、「おかあさんに頼んでストパーかければいいじゃん」って言った。励ましたつもりだったけど、それってもしかしたら、コ